

# 救命救急センターに搬送された自殺未遂者の 予後に関する中・長期間の追跡調査 — 再企図・自傷に影響する臨床的因子について —

河野 直子<sup>1)</sup> 衛藤 暢明<sup>1)</sup> 本田 洋子<sup>1)</sup>  
原田 康平<sup>1)</sup> 梅村 武寛<sup>2)</sup> 石倉 宏恭<sup>2)</sup>  
西村 良二<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup> 福岡大学医学部精神医学教室

<sup>2)</sup> 福岡大学医学部救命救急医学講座

**要旨：**背景：自殺未遂者はその後自殺既遂に至るリスクが高い事が報告されている。しかし、自殺未遂者の予後を予測する臨床的因子はまだ正確に評価されておらず、国内における再企図研究も少ない。そこでわれわれは、福岡大学病院救命救急センターに搬送された自殺未遂者の中・長期間の追跡調査を行い、再企図・自傷に関する評価を行った。

**目的：**自殺未遂者の1) 再企図・自傷の実態の把握、2) 再企図・自傷に影響する臨床的因子を明らかにすることを目的とした。

**対象と方法：**平成18年4月から平成19年12月までおよび平成21年11月から平成23年5月までの期間に当救命救急センターに搬送された自殺未遂者のうち、年齢、性別、精神科的診断、自殺企図手段（non-violent: 薬物・中毒, violent: 薬物・中毒以外）、自殺企図歴、自殺の意図（Suicide Intent Scale, SIS）、解離性（Dissociative Experience Scale, J-DES）、衝動性（Barratt Impulsiveness Scale, BIS-11）の臨床的因子が評価できていたのは82人であった。このうち、平成25年1月から同年5月までの期間に本調査に関する同意が得られた45人に再企図・自傷に関する調査を行い、臨床的因子との関連を調査した。

**結果：**45人の追跡期間は、平均3.8年（1.7-6.7年）であった。1) 再企図・自傷については、自殺既遂者はみられず、再企図・自傷率は28.9%であった。2) 再企図・自傷のリスクが高かった臨床的因子は、女性、精神科的診断のF6（パーソナリティ障害）、non-violentな手段を用いた者、自殺企図歴のある者であった。また、救命救急センター搬送時（以下、Indexとする）に用いられた自殺企図手段によって、再企図・自傷をした日までの期間に違いが見られた。Indexでviolentな手段を用いた者は平均3.3年、non-violentな手段を用いた者は平均0.6年であった。

**結論：**本研究の対象者は、致死率の高い重症自殺未遂者であり、先行研究より自殺既遂者や再企図・自傷者が多い可能性があった。しかし、再企図・自傷率は先行研究と同等であった。また、再企図・自傷に影響する臨床的因子について先行研究と比較すると、本研究の男性と精神科診断のF4（神経症性障害）は再企図・自傷率が低かった。当精神科における精神科的介入が再企図・自傷のリスクを減少させた可能性があった。今回の追跡調査の意義は、国内において自殺未遂者の追跡調査の中で、最も追跡期間が長く、初めて自殺未遂者の再企図・自傷に影響する臨床的因子を調査した研究である。重症自殺未遂者の再企図・自傷に影響する臨床的因子が明らかとなり、高リスク者の特定に役立つと考えられる。また、先行研究と比較し、再企図・自傷のリスクが低い因子もみられ、精神科的介入の効果が示唆された。

**キーワード：**自傷、再企図、自殺未遂者、救命救急センター、追跡調査